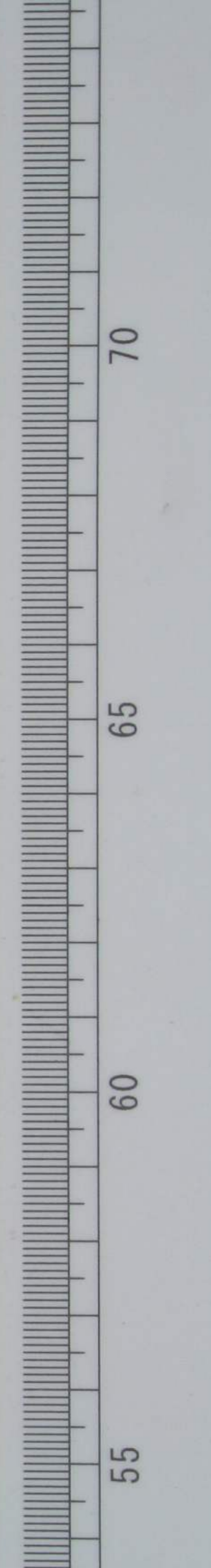


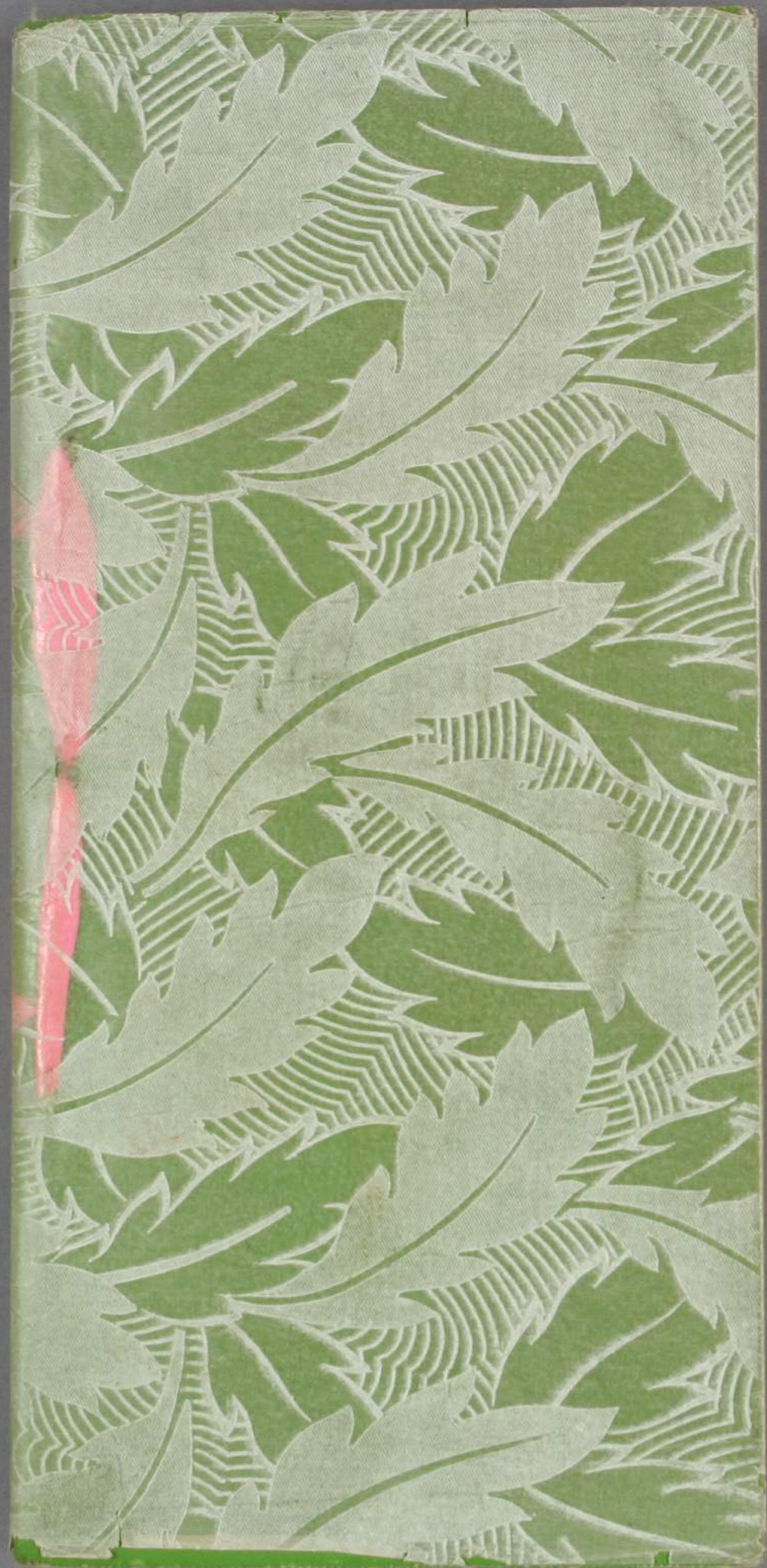


新詩
乳
姉妹



新詩乳姉妹の歌

溝口白羊作



新詩乳姉妹の歌

滿
日
白
羊
作

新
詩
乳
姉
妹

55

60

65

70

75

80



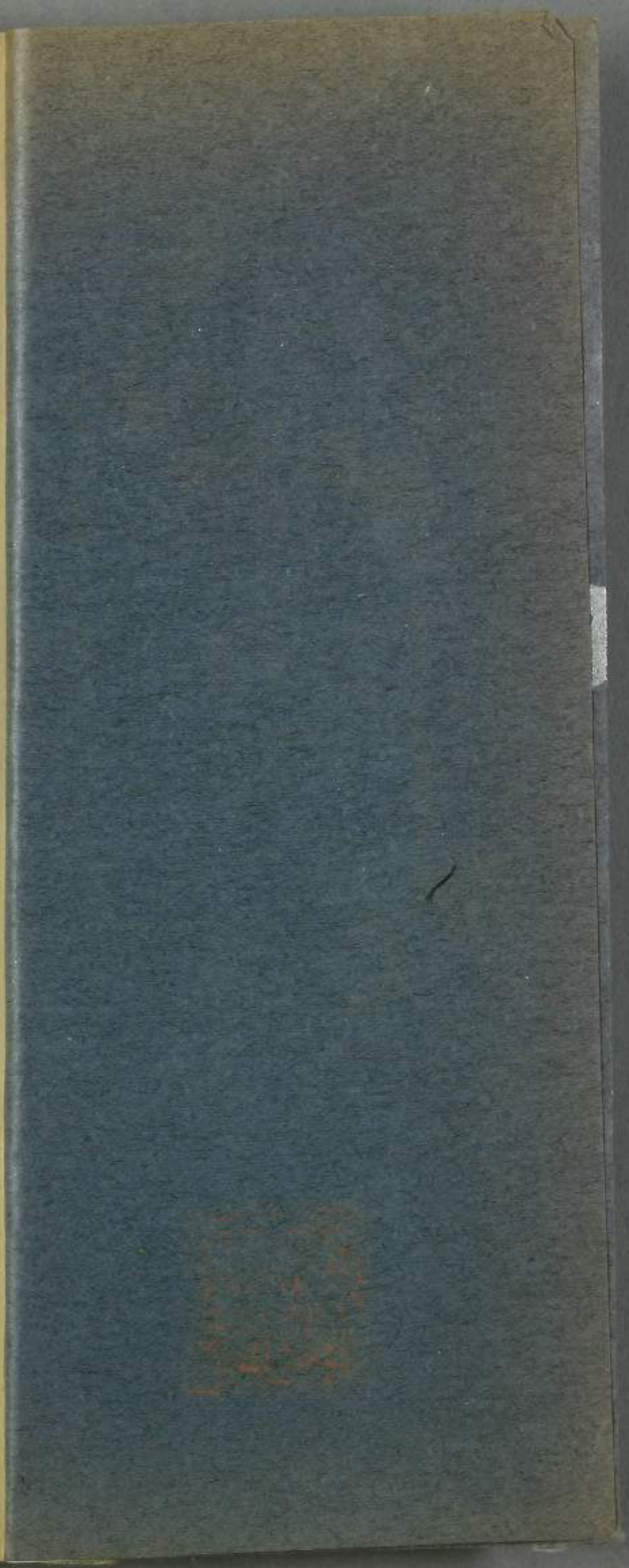
乳姊妹











序

予は當代散文壇の傑品を家庭詩に翻譯することに關する予が事業の第一期に於て、不如歸等四種の詩冊を刊行したり。而して此行爲は一般社會に對する趣味宣傳の目的を達するに於て、豫期の成果を收むること充分ならざりしとは雖も、少くとも詩的信仰の傾向を一部人士に與へ得たるべきを信ず。

乃ち第二期に於ては、前期に於ける成果に鑑み、語句の周

旋と取材の選擇に於て適當なる注意を加ふると同時に、事業根本の主義に最も大なる近接を爲す可く試みたり。『乳姉妹の歌』は、此目的の下に著はされたる我第二期初頭の述作なり。

予は此名譽ある第二期の出立點に於て、前途の祝福を祈念し、且つ原著者菊池幽芳氏に對して、誠實に敬意を表す。

明治三十九年四月

先心同に於て 溝口白羊自識



従て敢ての選擇は於て適當なる注意を加ふると同時に、事
業機本の主義に最も大なる近接を爲す可く試みたり。「乳結
味の歌」は、此目的の下に著はされたる我第二期初頭の述
作なり。

予は此名譽ある第二期の出发点に於て、前途の業績を評す
し、且つ原著者菊池幽芳氏に對して、誠實に敬意を表す。

明治三十九年四月

白羊自識





不詳

説と取材の選擇に於て適當なる注意を加ふるに、華
 業根本の主義に最も大なる近接を爲す可く試みたり。「其時
 妹の歌」は、此目的の下に著はされたる我第二期初版の進
 作なり。

予は此名譽ある第二期の出立點に於て、前途の祝福を祈
 し、且つ原著者菊池幽芳氏に對して、誠實に敬意を表す。

明治三十九年四月

白作自識



能と取替の選擇に於て適當なる注意を加ふると同時に、
 業根本の主義に最も大なる近接を爲す可く試みたり。「
 珠の歌」は、此目的の下に著はされたる我第二期初頭の述
 作なり。

予は此名譽ある第二期の出立點に於て、前途の戦線を新念
 し、且つ原著者菊池幽芳氏に對して、誠實に敬意を表す。

明治三十九年四月

藤田 日本自説

平四



新家
詩庭
乳姉妹の歌

並木の松を照らす日の
影もろするゝ夕まぐれ
飾磨のあたり来て見れば
驛鈴の響も途絶えつゝ

溝口白羊作

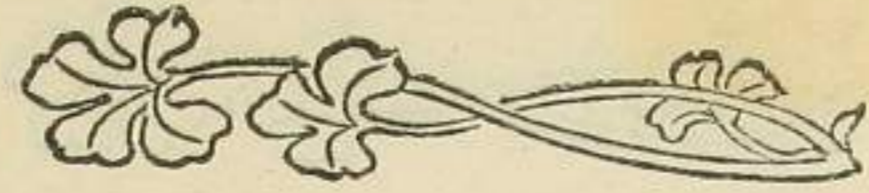




青田をわたる涼かぜの
草にそよ吹くなはて道
伸いそがせ来るひとは
いづこの家の妻ならん

玉の如なるやはら手に
愛しの兒をいだきつゝ
なを歎きの花のつゆ
優しき眼中に宿るなり

鄙に見馴れぬ手弱女の
都風俗をめづらしみ
里人だちがとりぐに
たふふることの恥かしく





洋傘かたむけて美女は
濱の方へといそぎしが
やがて下り立つ家の門
優しき聲におとなへば

迎へに出でし家びとは
夫れと見るより馳出て

「君江様」かといふ言も
いと嬉しげに聞こえけり

あはれ別れて年を経し
乳母と其乳に育ちたる
人の二人が手を取りて
語るこゝろや如何ならん

君江は我子抱きつゝ





しばし憂愁に沈みしが
 涙はらひてつくくと
 別れし後のものがたり

乳母よ汝が去にてより
 悲し我が家の憂き運命
 露をば宿すらぶれの
 袂に秋の月照りて



浮身を寄する他人の家
 世のうたてさを思ほへば
 庭の葎生に鳴く虫の
 聲も詫びしと聞かれつゝ

涙に過ぎし年つきも
 やさしき夫のみ情に



慰められて嬉しさの
むかしにかへる花ごころ

斯かる愛嬢もまうけつゝ
今は幸福ある身なれども
臺灣島に病みませる
夫を思へば悲しさの

いと疾く行きて我夫を
看護らんものと思へるを
暫時ぞ乳母よ君子をは
汝の家に預けてん

涙乍らに頼むをば
聞く其乳母も咽びつゝ
いと快く諾ひぬ



君江の喜悅如何ならん

乳母のお濱は我子をば

主嬢の前に抱きつゝ

「御名を假りて此兒も

君江と呼ぶ」と語らふや

思無げにも美しき
夢路を辿る子の上に

君江は涙おとしつゝ

紀念と残す神の聖書

別れ兼ねたる心をば

あのれと叱り勵まして

影も淋しく出立つを

乳母も涙に送りしが



ねびなん様の懐かしき
 この若草をおくらしして
 消えん空無きたらちねの
 魂はいづこを迷ふらん



夢か、此日を別れにて
 乗りける船の覆没りつゝ
 人は藻屑と成りにしと
 聞くに悲しき胸の中

何をも知らで我子なる
 君江といとも笑ましげに
 遊ばし君子を抱きつゝ
 乳母は涙に咽びけり



二

夢の様に過ぐる日の
 幾春秋を數ふれど
 君子迎へに来る人の
 絶えてあらぬが不審しく

飾磨を出て、岸和田に
 乳母は家居を移しつゝ、
 のどけく暮らす花の春

人を思へば袖ぬれて
 忘れがたみの君子をば
 名をも房江と呼びかへつ
 我子と共に育てしが



あはれの母の係や
 幼き胸に鑄られけん
 房江は若き貴女の
 姿を夢に屢見つゝ

娘心にいぶかしく

聞くに心は高波の
 騒ぐもつらき胸の中

春を重ねて美はしう
 花と生ひ立つ姿をば
 見るにも袖のそぼぬれて
 昔の事を歎きしが





房江は勉強もこたらず
 疾くも卒へぬる學び業
 家庭教師に招かれて
 和歌の浦にと赴くや

愛に満ちたる房江子の
 優し心を親みて
 思樂しく暮らしけり

姉の君江は引かへて
 榮華をのぞむ浮きごころ
 勇といへる若者に
 いと深くしも思はれて

かはすや戀のはかな言



勇は戀のしるしにと
 寶石美しき指環をば
 君江の許に送りしが

誓ふ言葉も浮々と

榮の光に酔はされて

妹背と成らむ行末を

（あはれ）



我子が斯かる仇戀に

浮かるゝとしも得ぞ知らぬ

お濱はいつか疾病の

重き枕につきそめて

醫師の手術の甲斐も無き

今を限の床の前



君江を近く呼寄せて
房江の上を語りつゝ

出す紀念の品々を
見るに君江の胸の中は
つく早鐘と亂れしが
お濱の息は絶えにけり

母の危篤と聞くよりも
驚き馳せて歸りたる
房江は犇と亡きがらに
伏して歎くも道理や

涙の中に過ぎて行く
七日は夢の如くにて
名残つきねば泣々に



又立歸る和歌の浦

明日は別れの同室に
君江と枕ならべつゝ
お濱が在りし其折を
涙に語りかはせしが

君江は母に聞きしより
房江の幸福を羨望の
心をいつか誘はれて
悪き企畫をおこしつゝ

清き夢路を辿るなる
房江起して語らふや
母が臨終の遺言を
我身の上と偽りて



いとも驚く房江子に
紀念の品を示しつゝ
我は華族の胤ぞとて
誇らしげにも見えにけり

あゝ我幸をぬすまれて

其幸福をよるこべる
房江ぞいともあはれなる



三

花はなの榮さかを歌うたはれて
 世よに時ときめける殿おとよにも
 漏もらさぬ秋あきの風かぜ吹ふけば
 小萩こはぎこぼるゝ庭にわの面おも

聲こゑも悲かなしき夕暮ゆふぐれを

殿とののあるじの昭定あきさだは
 昔思むかしおもひの露つゆの袖そで

あはれ戀こひしき我妻わがつまの
 君江きみえは海うみに沈しづみつゝ
 残のこせし兒この跡あとだにも
 いづこと知しれぬ波なみの上うへや



涙に暮るゝ幾年を
夢の心地に過ごせしが
この殿に招かれて
圖らず後を繼ぎし身の

黄金も玉も何せん
呼迎へんと様々に
草を分けても探れども

行衛も知れぬ春秋を
淋しく送る胸の中
頭の白さも増りしに
知れしと聞くが嬉しさや

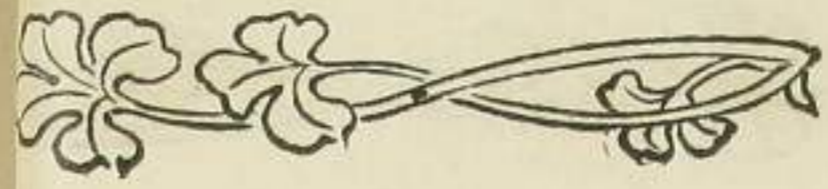


己おのが望のぞの其そのまゝに
 榮さかの殿とのの子こと成なりて
 數かずの寶たからを身みにつけし
 君きみ江えの胸むねや如何いかならん
 君きみ江えはいとも嬉うれしさの



迎むかのへ人ひとに伴つれられて
 歸かりし我わが子こ夫とと見みる
 老おいし心こゝろのよろこびは
 筆ふでにたとへん方かたも無なし

玉たまの姿すがたの美うつくしう
 立たすぐれたる形なり振ぶりを
 才ひとく鳥ときてたいまへしが



幾日を夢と暮らせしが
 流石に夜半の寢覺には
 罪に心を責められて

父が導く室の中
 壁にかゝりし姿繪の
 房江に似しをそれと見て



逃る様にも出てこし
 心の奥の苦惱しさよ
 斯くとも知らぬ昭定は
 いとうれしげに微笑みつ

せめて乳母への恩報じ
 房江を此處に呼びとりて



我娘わがむすめともなさんんと
言いふに君江きみえは驚おどろくや

苦くるしき言ことに紛まぎらして
空なしく過すぐる年月としづきの
いいつしか戀こひを知しり初はじめて
心こころに生おふる思おもひ草くさ

世よ嗣つぎ人びとなる昭信あきのぶを

慕したふ思おもひに惱なやみつゝ

それにつけても淺果敢あさばかの

昔むかしの誓ちかひくやみけり

あはれ夫をれとも白波しろなみの
外そとに君江きみえを思おもひつゝ
業わざうち勵はげむ青年わかものの





勇が聞かば如何ならん

君江は戀ふる昭信が

めでたき歸朝迎へんと

行くや品川停車場

花の姿は美しく

共に乗込む馬車のうち

いと耻かしく打向ふ

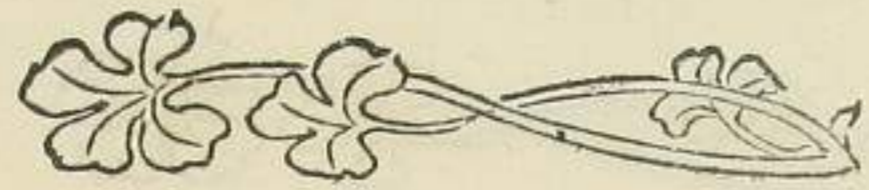
胸は高うも打つ波の

心は夢をたどる如

いと嬉しさに騒ぎつゝ

戀ふる思の通はぬを

深き憾と悶えけり





四
 空なる影も清き夜の
 草叢に鳴く虫の音は
 月に浮かるゝ詩人の
 音楽と人は聞くやらん



能の兆に名も高き
 鈴川伯の下やしき
 今日貴紳等を集へつゝ
 月見の宴ひらくなり

君江は戀し昭信と
 今日この家に招かれつ
 花と装ふ姿には
 月も羞ぢてやかくるらん



若き男子は今更に
 伴れ立つ君江昭信を
 羨しげに見送りて
 様々かくる戯れ言

それと聞くにも君江子は

掩ふとすれど顯はれて
 面は羞にかゞやくや

心厳しき昭信は
 浮きたる人が兎角と
 噂するをば厭ひつゝ
 一人彼方に立去りぬ





とり残されし君江子は
 固く握りし手中の
 珠とられたる心地して
 淋しく立つや庭のかけ

清き光に照らされて

花の姿はさながらに

こゝに在るかと思われけり



君江は琴を弾くさへも
 今はものうき心地して
 涼しき風に吹かれんと
 奥庭さして歩みしが

夢の心地にいつしかと



人無き方に來りつゝ
 虫の鳴音に聞き惚るゝ
 折から見えし人の影

男女か伴立ちて

語らふさまに君江子は

茂みの蔭に身を避けて

聞くとも無しに聞居れば

男は三室滋とて

悪しき噂の若男

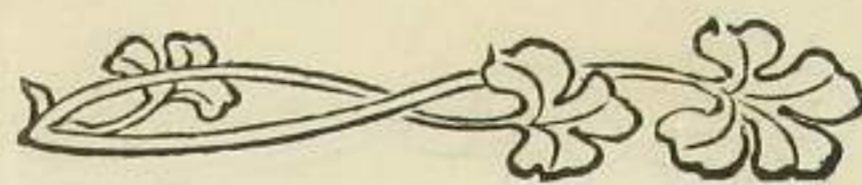
友なる葉守夫人をば

恐ろしげにも脅すなり

昔の戀の玉章の

今圖らずも身を責むる





鬼おにの得物えものと代かりつゝ、
苦くるめらるゝあはれさよ

悪わるき三室みむろが悠然いゆうぜんと
勝かち誇ほこりつゝ、歸かへり行く
跡あと見み送りて君江子きみえこは
葉守夫人はもりよじんを慰なぐさめつ



「安やすんじ玉たまへ我身わがみ今いま
奪うばはれませし品々しな々を
とり返かへ來きて參まゐらせん」
言いひつゝ、三室みむろ追おひ行くや

人ひと無なき蔭かげに追おひ付つきて
滋しほ責せめつゝ品々しな々を
奪うばひかへして君江子きみえこが



歸らんとする折柄に

其戀人の昭信は

楓のかけに來かゝりて

此有様を夫れと見つ

心に深く疑ひぬ

暑き涙を落しつゝ

救の神と寄すがる

夫人の胸や如何ならん

女の爲に責められて

空しく歸る口惜しさ

三室はいたく怒りつゝ

仇復さんとおもふ哉





五

霽はれたる秋あきの空そら高たかう
春はるにも似にたる日ひの影かげは
千草ちくさ花はな咲さく野のに照てりて
葉蔭はかげの露つゆぞ美うつくしき

いと睦なごまじく伴つれ立ちて
こゝの公こう園えんに來きたりつゝ
ペンチペンチの上うえに休やすらふや

仰あやげば北きたの山やま晴はれて
雪ゆきを頂いたく秀はつみの峯みねに
かゝれる雲くもは大洋おほわたに
躍おどる波なみとも見みられつゝ



都みやこあたりに見みも馴なれぬ
 桂かつらぎや榆いんや白楊びやくやうや
 天そらをも衝つかん勢いきほひに
 喬木きやうぼく高く聳そびえたり

野面のせを見みれば一筋ひとすぢの

川かはは静しづかに流ながれつゝ

草くさ柔やわらかきニレの木の
 日蔭ひかげに睡ねる牛うしの群ぐん



外國人とくこくにびとの畫ゑにも似にる

いと美うつくしき眺ながめやと

房江ふさゑは己おのが教をしへ子この

綾子あやこと共に稱たへしが

綾子あやこは房江ふさゑ仰あやぎつゝ



一師は何の木や愛でませる
 妾はニレの木をこそしと
 優しく問ひて微笑みぬ

房江も花の頬に笑みて

我は桂の蟲々と

いと逞ましき姿をば

好むといふも面白や
 健と言へる教へ子の

「大きく成らばわれも又

桂の如に成りなん」と

勇みていふが潔き

願ます房江願みて

健はいよゝ勇みしが

「姉は如何なる木にか成る





楓ばかりに成りやせん

聞くに房江は微笑みつ
ベンチの下に生出し
色も濃紫の菊の花
やさしき指に摘取て

この花の如飽く迄も
優しき色を保たんと
綾子と共に語るかな

興いと深き逍遙に
房江は幸福をおぼえつゝ
頓て二人を伴ひて
我家に歸るや教へ子の



今日迄姉の如くにも

老の涙に筆染めて
疾く来よとしも昭定の
誠こもれる文見るに
房江は心動きつゝ



綾子と共に琴弾きて
ゆかしく遊ぶ折柄に
花の都ゆとゞきたる
我を迎への文だより

榮望まぬ性なれば
行かじとのみに此迄の
答へて過ぎし今日乍ら



いと親したしみし教をへ子の
別わかれ悲かなしみ止とどむるを
思おもへばぬる、袖そで袂たもと

立たち去さり難がたき里さと乍ながら

歎なげく綾あや子を慰なだめつゝ

心こゝろ定さだめて房ふさ江え子は

あはれ互たがひに知しらずして

隔へたつ百ひゃく里りの西にしひがし

心こゝろや遠とほく通かよひ來きて

父おや子この中なかを結むすぶらん



六

庭の草葉に置く露の
いつしか霜と成る程に
樹々の梢は紅葉して
秋の景色の美しや

文も優しき薄墨の

跡眺めつゝ君江子は
ひとり愁ふる居間の中

あゝ房江子の此處に来て
若し我罪の顯はれば
戀も榮もうたかたの
何處に身をばやはらはれむ



身はさりとても懐しき
 戀しき人と別れては
 何を頼みに生存へむ
 と思ふに心亂れつゝ

いかで心の思をば
 戀しき人に打明けて
 悶ゆる胸のいと苦し

世に類無き美人の
 斯く迄我を思ふぞと
 知るや知らずや昭信は
 獨書讀む楓蔭

静けき興に耽りつゝ



只それと無く打明くる
 君江が胸の思ひをば
 何と聞くらん昭信の



尙讀み進む折柄に
 薫床しき裾さばき
 君江ぞ此處に來りけり

それと見るより昭信は
 讀み居し書をさし置きて
 君江を傍に迎へつゝ

聞く君江子の胸の中は
 高波打ちて騒ぎつゝ
 戀しき人の其聲は
 玉の響と聞こえしが



聲も言葉もおごそかに

「我は御身を妹と

思ふ外には何事も

胸に思の無きものを

かにかく囃す人ぞ憂き」

彼方に遠く行く影を

悲しく送る君江子の

眼中は涙にうるみつゝ

あゝ我父の昭定は

如何なる事のあり迎も

汝に昭信を添はさんと

言葉固くも言ひませど



身も死ぬばかり斯許
戀ふる心を其人の
知らず顔なる無情さよ
うたて我身を如何にせん

涙に氷る双袖を
解く春風も荒磯の

草葉の虫と咽ぶかな

折柄來にし昭定は
君江の心思ひ遣り
泣入る背を搔撫て
情も厚く慰めぬ

今、朱の色に輝ける





櫛びの大おほ樹きに日ひは映うつして
 燃もゆるが如ごとき光くわう線せんは
 大理たい石しの女す神が像たを飾かざるかな



七

思おもひの儘ままに綺きら羅らを着きる
 榮さかえの身みとは成なりにけれ
 罪つみの怖おそれに安やすからぬ
 君きみ江えの胸むねの苦くるしさや
 房ふさ江えは己おのが身みの幸さいを



奪られし事と知らなくに
 姉の情を身に泌みて
 いと深くしもよろこびつ

美しく花の殿の中に
 絶えて久しき君江子と
 又めぐり逢ふ嬉しさの
 心は波と躍りけり



君江も流石懐かしさ
 二人親しく語りしが
 頓て父なる昭定に
 紹介せんと出て行く

書讀み居つる昭定は
 「これぞ房江」と君江子が
 言ふ其聲に驚きて



二人の方を眺めしが

子とは知らねど何やらん

忘れ難き面影の

我ひきつくる心地して

涙に握るや其手をば

あはれ誠の父と子が



知らで相會ふ秋の夜の

悲しさ添ふる虫の聲

二人の胸や如何ならん

名も高輪の殿には

又美女の數添へつ

花の二人を比べては

いづれ劣らぬ色乍ら



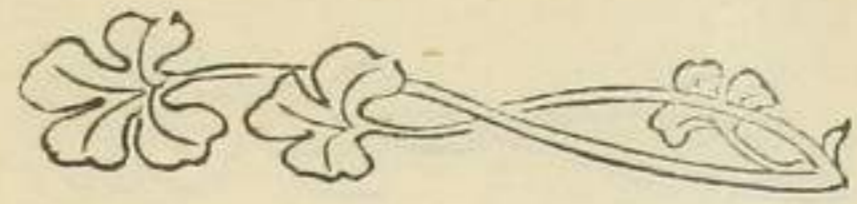
神や宿ると見ゆばかり
涼しき眼中に打向ふ
人は心も和らぎて
皆房江子をたへけり

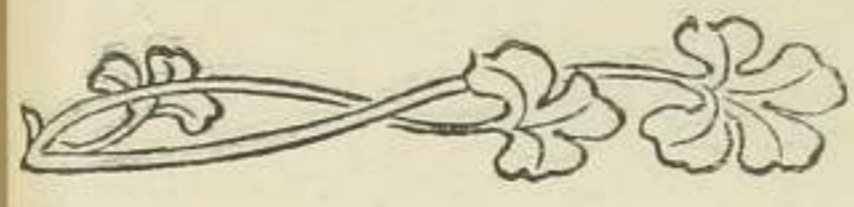
房江君江は睦まじく
琴よ何よと諸共に
遊びて暮らす秋の日や

父は心に嬉しさの

二女揃ひし姿をば
繪に描かせんと誘ひて
三人同乗る馬車の中
繪師の家にと赴きぬ

繪師は三人を迎へつゝ





前まへに仰あやせを蒙かうむりし
其書姿そのみすの成なりぬとて
静しづかに除のぞく蔽おほひぎぬ

見みる昭定あきさだの目めの中うちは

熱あつき涙なみだの溢あふれしが

「汝おんみの母はを見みよや」迎むかへ

恐怖おそに震ふるふ君江子きみえこの

其有様そのありさまを昭定あきさだは

深ふかき歎なげきの餘あまり

いと可憐あはれにも思おもひしが

幼をこき折やりの夢ゆめに見みし

其梯そのをりかと見みるよりも

房江ふさえは面蒼おもてあせざめて





夢を語るは小さきより
 房江の癖と紛らしつ
 「秘密」は霧に隠れけり



夢見る如く佇みぬ

昭定はいと驚きて
 如何にせしかと尋ねれば
 房江は事も細々と
 夢の有様語らふや

聞くに君江は驚きて



八

闇に誘なふ者ありて
我を誘くかと覺えつこ
我身ながらも斯許
慕ふこゝろを不審れど

亡き君江子が書姿の



母のやうにも懐かしく
房江は今日も其下に
立ちてぞ仰ぐ室の中

今にも額を抜け出て
我に語らん有様を
見るに心も躍りつゝ
夢と佇む折柄に



老いたる主昭定も
此の室にと來りつゝ
又今更に追懷の
つらき涙に咽びしが

結ばれたる心さへ
房江が花と愛らしき
其俤を見るときは

晴るゝ心地に紛れつゝ

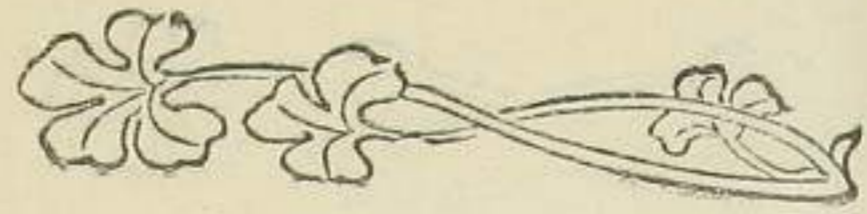
優し房江の手をとりて
いふ其聲も莞爾に
「琴を奏てゝ老人を
慰めてよ」と頼むなり

父の勸告に瓜さして



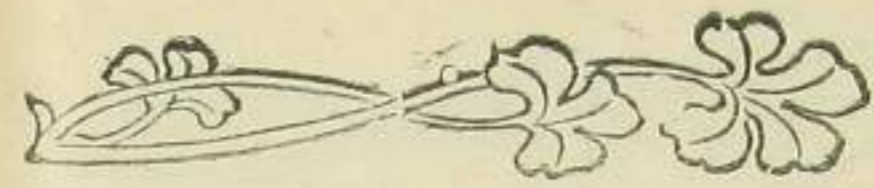
房江は琴に向ひしが
奏づる曲も「薄雪」の
いとあはれなる歌のふし

珠を走らす絃の音の
急げば秋の夜の雨
板屋の軒に降るに似て
ゆるき響は細流や



流れて合ひて珠ぞ散る
二十五絃の数々に
巧をつくす調べには
空ゆく雲もたゆたはん

我が弾く琴に誘はれて
興に乗りたる房江子が
花の姿はさながらに



天津乙女と見られつゝ

今、調をば聞きぞ入る

昭定の眼は輝きて

夢の心地に面のあたり

亡き妻に逢ふ其思

古き昔を追懐の

袖に降しく露時雨

固く組みたる老の手は

あはれ微かに震ひけり

折しも父を尋ねんと

こゝに出来し昭信は

妙なる音に聞惚れて

夢見る如く立ちにしが





絃の調はいや急きて
 彌々進む歌のふし
 聞くに心の昂りて
 恰も酔ひし如くなり

調べ終りし房江子が
 見知らぬ人を夫れと見て
 深く耻ぢらふ其様に

父は二人を紹介せつゝ

覺めたる如き昭信は
 房江がいともしほらしき
 花の姿を今更に
 美しところを眺めしが

あはれ理想の我妻は



此人ならで世に無しと
 思ふ心の動きつゝ
 三人楽しく語りけり

今、昭信は嬉しさに
 若き心も活々と
 逞ましき頬に上る血は
 華とひらきて匂へるや

我戀人の昭信が

房江といとも楽しげに
 語らふ様を垣間見し
 君江の胸や如何ならん





九

戀は仇なるものぞとは
 いづこの鳥辭が言初めて
 情冷めたさ人々に
 斯かる言葉を残しけん

館の公子なる昭信は

房江を一目見てしより
 其懐かしき面影の
 深くも胸に鑄られつゝ

忘れんとすれど忘れぬ
 奥の心は密やかに
 戀をさやく夕惑ひ
 煩悶知る身と成りにしが



書を見^みるにも飽^あき果^はて、
 涼^{すず}しき風^{かぜ}に吹^ふかれんと
 下^おり立^たちて行^ゆく庭^{には}面^{もて}に
 今^{いま}を盛^{さか}り^りの爐^{ばち}紅^{もみ}葉^ぢ

夕^{ゆふ}に近^{ちか}き秋^{あき}の日^ひは
 染^そめし梢^{こすえ}に輝^{ひび}きて
 池^{いけ}の面^{おもて}はあか〜と

茜^{あかね}の色^{いろ}を映^{うつ}しつゝ

ふと目^めをあ^あげて眺^{なが}むれば
 櫺^{かへて}が下^{もと}のあづま屋^やに
 いともけだかき形^{かたち}して
 書^{よみ}よむ人^{ひと}の後^{うしろ}かけ

心^{こころ}とも無^なく近^{ちか}づきて





それと見るより昭信は
 房江の君と呼びかけて
 傍近く行き寄りぬ

俄の事に驚きて

耻ぢらふ人の花の面に

紅葉の影の照り映えて

神とも見ゆる姿かな

夢見る如きまなざしに

房江を見入る昭信の

心は戀に臆れつゝ

言ひ出る言もなかくくに

房江が置きしバイブルを

其手にとりて眺めしが

菜にとてや扱まれし





色も濃紫の菊の花

花の香は萎れけれ
摘みて挟みし其人の
やさし心ぞ偲ばれて
昭信はいと懐かしく

何を紀念の花なれば

斯くは柔に狭むらん
厭ひまさずば其故を
語り給へと迫るなる

房江は若き公達に

問ひ掛けられて耻かしく
追憶多き其折を
つゝましげにも答へしが





忘られ難き紀念にと
 挟みし菊の紫色の
 優しき色を其まゝに
 深き心は知られけり

いとしをらしき房江子の

此物語聞入れる

昭信の目は輝きて

胸はいよ／＼騒ぎつゝ

思はず花に接吻けて
 誠をこめし言の葉に
 「房江の君よ此花を
 われに給へ」と言出でぬ

思ひも寄らぬ請求をば





聞^きく房^{ふさ}江^え子^こは見^みるくくに
花^{はな}の頬^ほ赤^{あか}く染^そめについ
さし垂^{つり}頭^{あたま}て耻^はぢらふや

聞^きけぬ許^ほりにいと低^ひき
聲^{こゑ}して「さらば捧^たげん」と
言^いふを聞^きくなる昭^{あき}信^{のぶ}の
其^{その}よろこびや如^い何^かならん

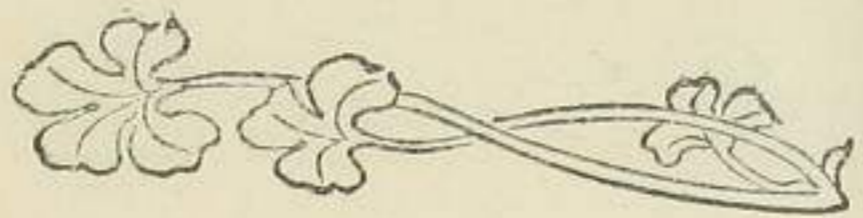
見^みえぬ赤^{あか}繩^{じゆ}に繫^つがれて
やさし二人^{ふたり}が胸^{むね}の中^{ちゆう}に
崩^{くずれ}せる戀^{こひ}を永^{とこ}久^{しほ}に
神^{かみ}よみ空^{そら}に守^{まも}れかし



十

戀に酔ひたる若者の
樂しき夢はさながらに
蜜の芳香に憧憬れて
飛交ふ蝶の心とか

潔き心の底深く



萌し初めたる戀草の
抜くよしも無く根をさして
彌生繁る胸のうち

君江は房江昭信の

心を夫れと知るよりも

嫉妬に胸を焦しつゝ

如何にせましと悶えしが



心こころにたくむ謀はかりごと
 父ちちの言葉ことばに假か托たくけて
 あはれ優やさしく相あ思おもふ
 二ふた人りの仲なを阻はみけり
 父ちちが君きみ江えを昭あき信のびに
 娶うりはさんずる心こころをば
 それと聞ききたる房ふさ江え子この

心こころの中うちは苅かりりごもの

亂みだれくくて解とく由よしも
 荒あ磯いそ浪なみに袖そでぬれて
 嬉うれしき夢ゆめのつれなくも
 覺さめし朝あしたに似にる思おもひ

神かみの道みちをば守まもる身みの



何^{なに}悲^{かな}みに洗^しひぞと
 ひとり心^{こゝろ}を叱^{しか}れども
 零^{こぼ}つる涙^{なみだ}は止^とらで

人^{ひと}は櫻^{さくら}の花^{はな}の下^{もと}に
 遊^{あそ}び歌^{うた}へる春^{はる}の日^ひを
 我^{わが}身^みひとり曠^{くわう}野^のに
 うち捨^すてられしなげき哉^{かな}



あはれ恩^{おん}ある姉^{あね}の爲^{ため}
 其^{その}初^{はつ}戀^{こひ}を捨^すてなんと
 悲^{かな}しく心^{こゝろ}定^{さだ}めたる
 房^{ふさ}江^えが胸^{むね}は知^しらぬ身^みの

心^{こゝろ}をこめて我^{わが}戀^{こひ}ふる
 可^か愛^なしの人^{ひと}の何^{なに}なれば
 此^{この}頃^{ころ}我^{われ}をうとみつゝ



姿見するも厭ふらん

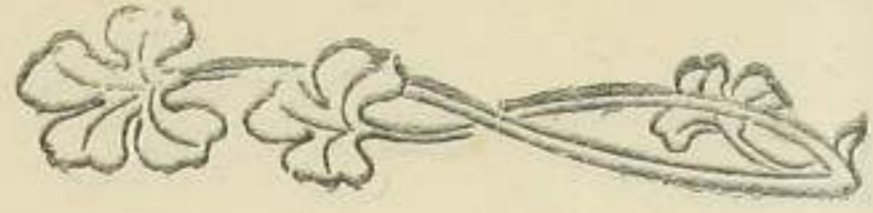
それと思ひてつくぐと

憂に沈む昭信の

面はいたく蒼ざめて

吐く其息も力なし

あゝ房江子を見てよりは



淋しき秋の此頃も

愁忘れてありけるを

世をも樂しと思ひしを

戀や夢なる、現なる

さめて悲しき夕暮を

吹くや秋風音も無く

桐の枯葉を落とすなり



折柄空を鳴連れて
 南に急ぐ雁の聲
 思ある身は一入に
 胸にひびきて惱ましく
 障子開きて忙然と
 雲を眺むる折しもあれ
 房江が居間の其方に

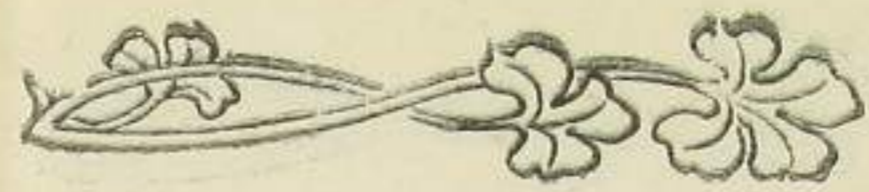
ゆかしピアノの聞こえけり

深く心に鑄られたる
 響をそれと聞くよりも
 我を忘れし昭信は
 夢の心地に問ひ行きぬ

思ひ餘りし昭信が



心落ちつゝ悄然と
 居間に歸りし昭信は
 紀念の菊に接吻けて
 雨と涙をそぐかな



うらむ言葉の葎々と
 胸にこたへていと辛く
 房江は涙に咽びしが

道の爲ぞと思ひては
 衿を正して昭信に
 君江娶れと勸むなる
 奥の思やいかならん



十一

天に高照る月だにも
 缺くる運命は免れず
 限無き光浮雲に
 しばしの影を隠すとか
 花の殿と歌はれて



世は未枯るゝ頃乍ら
 こゝ許なる春景色
 榮華を人に知られしが
 百千の黄金積むとても
 秋は悲しき夕まぐれ
 老いし主の昭定は
 重き病に誘はれて



世嗣人なる昭信も
 圖らず受けし其胸の
 傷の痛に惱みつゝ
 凶事のみぞ重なりぬ

房江は心一すじに
 父の病の癒えよとて
 身をば惜まず看護りしが

盡す誠や通ふらん

床に打臥す昭定は
 真心籠めし房江子の
 其介抱の嬉しさに
 惱らすらぐ心地して

誠の子とは知らねども



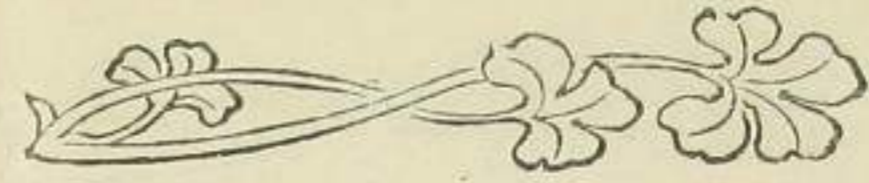
房江よさえの面おもて見みることを
深ふかき慰なぐさに思おもひつゝ、
夢ゆめの様ようにも過すぐる日ひや

君江きみえは戀こふる昭信あきのぶが
病やまひの床とこに侍はべりつゝ、
心こゝろ盡つくしの介抱かいほうに
帯おびをも解とかぬ幾日いくひ數かず



たかぶる熱あつに浮うかされて
深ふかく惱なやめる昭信あきのぶが
猶房江なほよさえ子こを忘わすれ兼かね
幻まぼろしに述のぶる謔語うはごとを

夫それと聞きいては村々むらむらと
嫉妬あやしみ心こゝろの起おこりつゝ、
あゝ何なになれば我戀わがこゝろの



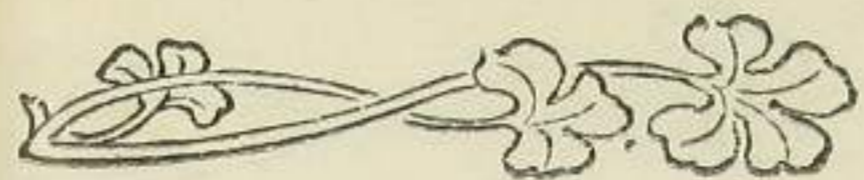
斯くも通らであるやらん

いたつく人の枕許
活けりとも無き昭信の
其おもかげを眺めつゝ
君江は獨袖咬みぬ
夜をも寝ねて只管に



君江が病看護るをば
それと知りぬる昭信は
心苦しき堪へねども

其眞心を思は
君江の胸もいぢらしく
流石に心動きつゝ
いつしか消ゆる厭はしさ



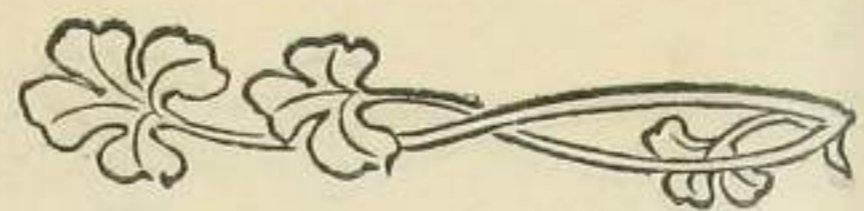
十日ばかりを経る程に
 さしも惱みし昭信の
 傷は漸々癒えかけて
 結ぶ眠も安らかに

清き花香の身に泌むと
 夢よりさめて驚けば
 牡丹の花を手にもちて

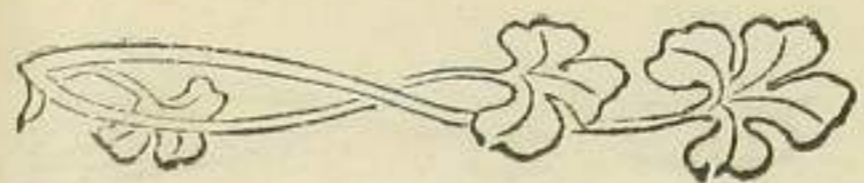
立ちし君江が朝姿

花の中より抜出て
 假に姿をあらはせし
 人かとはかり昭信は
 現心地に眺めしが

君江は戀ふる昭信に



あはれ義理てふ柵に
 身は縛られし憂運命
 我初戀を犠牲とせし
 胸のなやみや如何ならん



盡くす心や透りけん
 いと情ある言の葉を
 聞くに心は嬉しさの
 花の香に酔はされて
 夢路を辿る昭信の
 熱き其手を啜りつゝ
 思はず清き頬を染めぬ



君江が盡す介抱の
 其甲斐ありて昭信は
 日を経る程に快く
 憂愁重ねし人々の
 眉も少しは開きしが
 いや重なるなる昭定の
 病は癒ゆる期もなく



十二

世は新らしき年迎へ
 七五三繩よ門松よと様々に
 罵り騒ぐ頃乍ら
 春としも無き殿の中
 戀ふる心の一筋に



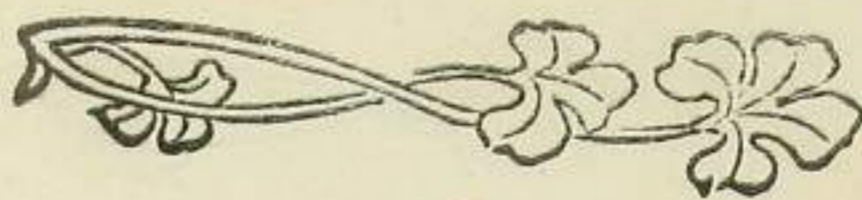
房江が身をも忘れつゝ
 いとも劬はる真情に
 老の心は和らぎて
 窶れし頬にも浮く笑の
 快げにも装ほへど
 日増まざる衰弱を
 それと見るにも房江子の



小さき胸は騒ぎけり

庭の椿の花咲きて
 今日けふは霽れたる冬ふゆの朝あさ
 房江は父が疾病の
 枕まくらに近く侍りつゝ

夢の心地こゝろにうつら病む



老の心のなぐさにと
面白げにも様々の
花物語聞かせしが

たゆげに開く其眼中の
光も薄き昭定は
霜夜に細る虫のごと
悲しき聲を絞りつゝ



房江を前に呼寄せて
「死に行く我の思ひ出に
汝が優しき琴の音を
聞かん」といふも力なし

房江は何と慰めの
言葉もあらで咽びしが
父の望に任せつゝ



涙に弾くや「残月」の

磯邊の松に葉隠れて

沖の方へと入る月の

光や夢の世を早う

さめて真如の明らけき

月の都に住むやらん



今死ぬ人の其前に

奏づる曲の悲しさに

荒ぶる鬼も泣きやせん

咽ぶが如き調かな

房江は我と言ひ知れぬ

悲し思に誘はれて

弾く琴の緒も湿々と



降りそゞくなる袖の露

幻にまよふ昭定の

耳元近く口寄せて

父よと呼べば目を明きて

まだ覺めやらぬ夢心地

「わが亡き妻は何處に」と



心も空に求めしが

「我は黄泉へ旅立たん

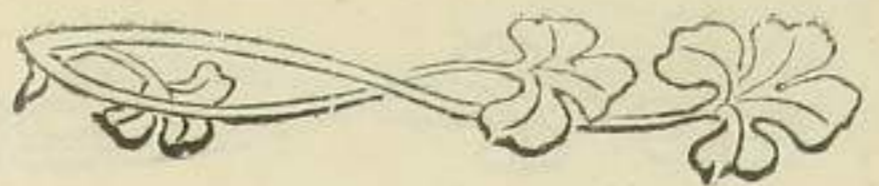
母君呼びて來よかし」と

いふを聞くなる房江子の

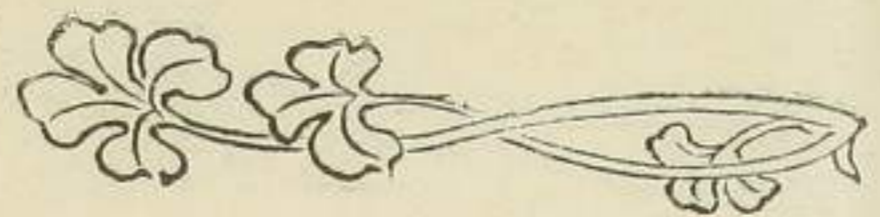
胸は高波騒ぎつゝ

淋しく室を出て行く

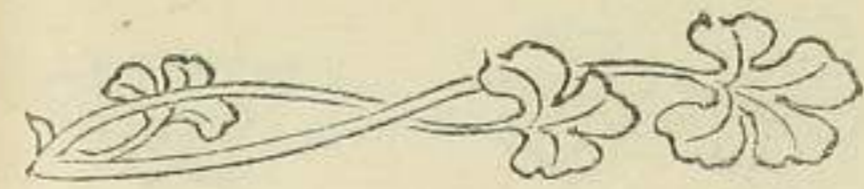
心の中や如何ならん



母と名残を惜みつる
 昭定は今入りて來し
 君江昭信眺めつゝ
 其眼に宿す露の玉
 あはれ我子よ昭信と
 未睦ましく暮らせよと
 言ふばかりとば殘言

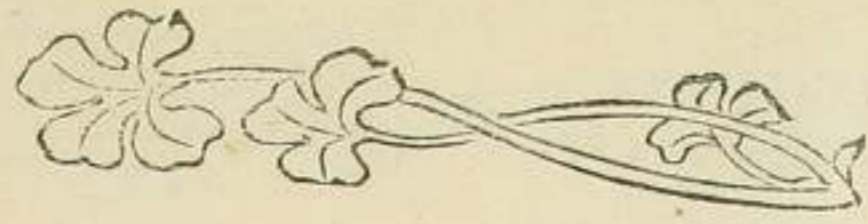


細りし息も絶果てぬ
 抑ふとすれど人々は
 おつる涙にかさくれて
 黒白も分かぬ闇の中に
 灯消えし心地かな



十三

歎きの中に年暮れて
 夢の様にも過ぐる日の
 世はあら玉の春景色
 子等は楽しく遊べども
 樂しかるべき初春を



喪にうち籠る人々の
 心は深くとざられて
 思淋しき松の内
 戀の叶ひし嬉しさに
 君江は流石いさめども
 房江は父の昭定を
 慕ふ思の堪えがたく



在りし昔を語りては
 祖母共々に悲しむや
 百の思に昭信の
 袖も乾る間は無かりけり

あはれ父なる昭定が
 臨終の頼み拒み兼ね
 君江を妻とすることを

神掛けてもと誓ひしが

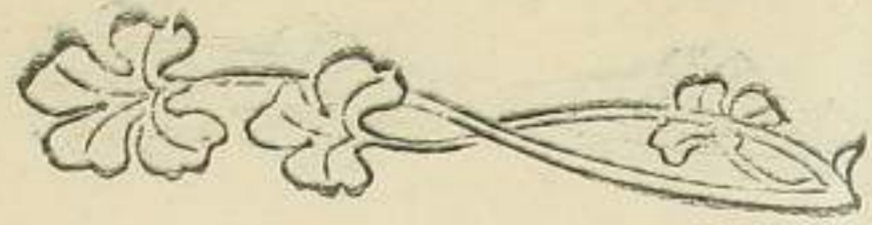
忘るとすれど只管に
 忘れ兼ねたる房江子の
 其面影は立ち去らず
 今も心を迷ひつゝ

又募り来る思をば



我われと叱しかりて昭信あきのぶは
 苦くるしき胸むねを忍しのびつゝ
 惱なやみの中うちに過すぐる日ひの

いつしか春はるも三月さんぐわつの
 花はな咲さく頃ころと成なりぬれば
 後うしろの園そのに鳴なく鳥とりの
 聲こゑも長閑のどかに聞きこゆなり



君江きみえは戀こふる昭信あきのぶと
 晴はれて嬉うれしく添そはん日ひを
 心こゝろの中うちに樂たのみて
 夢ゆめみ華はなやぐ春はるの夜よ

思おもひあがりしその面おもてに
 情なさけの影かげのたゞよひて
 笑えみ美うつくしき花はなの頬ほは



玉のやうにも輝きぬ

今、喜悅に酔はされて

心空なる君江子が

小さき胸はさまざまに

行手の幸を描きしが

友を訪ふとて其家を



出でつゝ車急がせて

心とも無く行道に

思はず見えし人の影

俤の上に君江子は

何心無く眺めしが

見る其面の青褪めて

唇までも震ひつゝ



未だ米國にありぬ可き
 勇がなとて歸りけん
 と思ふに騒ぐ其心
 車疾くく急がせて

飛ぶが如くに行跡に
 勇の聲は迫りつゝ
 いかにせましと身悶ゆる

君江の胸の苦しさを

いづこを行ぞとも知らで
 夢の心地に逃入りし
 葉守が家の玄關に
 とゞろく心沈めけり

葉守夫人は恩義ある





歸り待ち居し青年は
 人違どと見るよりも
 心落ちつゝ悄然と
 立歸り行く後影



君江が上の危うさを
 それと聞くより憂ひつゝ
 共に心を碎さしが

似し面影を幸に
 君江の衣を身に着けて
 勇の目をば晦ますと
 車に乗りて出て行く

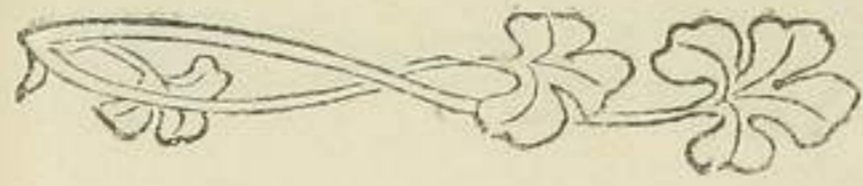


十四

花はな咲さく春はると見みる程ほどに
 夢ゆめ驚おどろかすゆふ嵐あらし
 獨ひとり愁うれふる君きみ江え子この
 胸むねは霞かすみにとざゝれて
 あゝ一度ひとたびは情なさけある

葉は守り夫人ふじんに救すけはれて
 勇いさむの目めをばのがれしが
 偕さ此この後ちを如何いかにせん

それよ是これよとつくづくに
 悲かなしき末すえを思おもうては
 華は美でを好このめる其その性さがも
 あはれ流なが石がに濕しめりつゝ



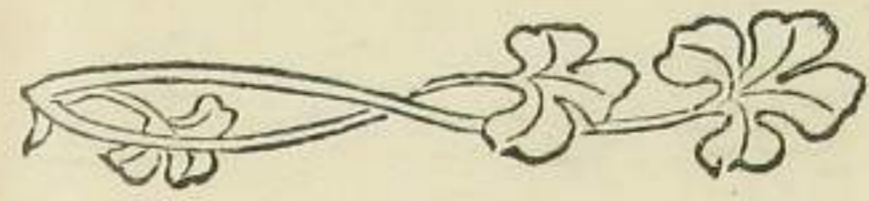
斯かる頃をば垂籠めて
 我世を花に背さしが
 忘れては又いつしかに
 燃立つ春のうさ心

花にさはらぬ風吹きて
 天つ空なる戀人に
 戀をさしやく雲雀子の

聲ものどけき霽の日や

今日を上野に来て見れば
 花も盛の木の下に
 美人つどふ慈善會
 春の色香を競ふなり

人の勸に君江子は



この會に加はりて
煙草を賣るや人々に
聲も姿も美しく

見る人々が今更に
二無き姿をたへつゝ
過行く影を見送りて
心に獨微笑みぬ



折しも此に出來つる
三室滋は君江子の
姿をそれと見るよりも
忽ち其處に近づきて

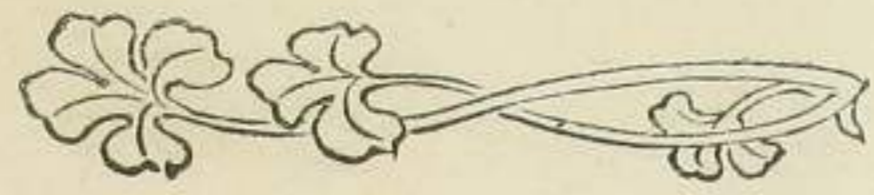
驚く姿見下ろしつ
「過ぎにし秋を忘れず」と
嘲笑ひつゝ去りにしが



君江は騒ぐ胸の中

今はいとしも落魄れて
人脅かす悪記者と
成りしと聞くにいとど尙
安き思の無かりけり

君江が獨忙然と



立ちて眺むる折しもあれ
近き彼方の木蔭に
此方見詰むる男あり

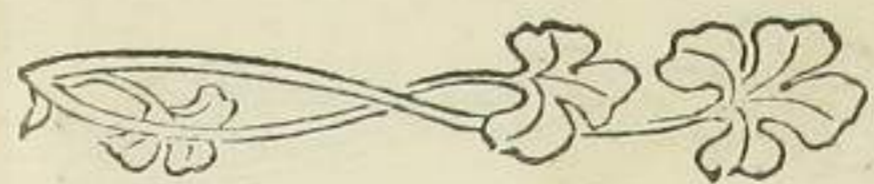
立てる其身を慄はせて
燃ゆるが如き眼ざしに
君江の面眺めつゝ
夢の心地に佇むや



思おもひ餘あまりて駈か寄よると
 行ゆかんとしたる出會いであひに
 滋しほる足あしを踏ふまれつゝ
 思おもはず聲こゑを立てにしが
 滋しほる面おもて仰あへぎつゝ
 彼處かしこに立たてる令嬢れいぢやうは
 いづこの家いへの人ひとやらむ



聞きかせ給たまへと迫せまりけり
 故ゆゑあり氣けなる若者わかものの
 素振そぶりを夫それと見みるよりも
 仇復あたかへすべき時來とききぬと
 心こゝろひそかに喜よろこびて
 「知らずや彼女かれは名なも高たかき



高輪殿の嬢むすめぞと
いふをば聞ききて驚おどろきの
聲こゑを思おもはず放はなちつゝ

立去たちさらんずる男をとこをば
滋しけるは止とめて名なを問とへば
「われは高濱勇たかばしゆうぞ」と
答こたへて人ひとに紛まぎれ行ゆく

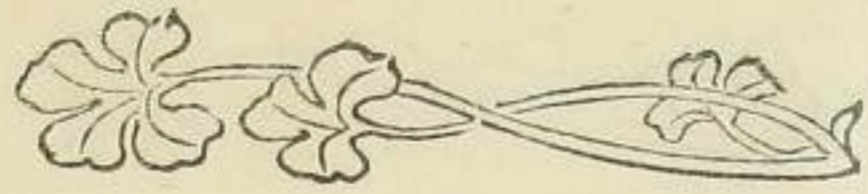


後姿うしろすがたを見送みおくりて
三室みむろはひとり微笑はなみぬ
あはれ毒蛇どくじやに覘ねらはるゝ
花はなの運命さだめや如何いかならん



十五

花の君江が美しき
 其名はいとど輝きて
 世に囃さるゝ其譽
 聞くに房江も嬉しさの
 我身の上の如くにも



姉の譽をよろこぶや
 今か榮に満ち足りし
 君江の幸は極りて
 天にも上る春思
 驕る心を鞭ちて
 雲井に近き御館の
 榮の宴に参りしが



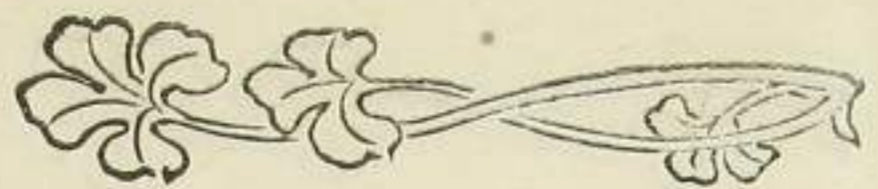
疲れて歸る我家の
 居間に其身を安めつゝ
 何心無くとり上ぐる
 櫛に挟みし紙の片

とりて開けば勇より
 送りし文と見るくくに
 花の面の色褪せて

もつ手はいたく震ひつゝ

あはれ君江が生命なる
 誇も、戀も、幻象の
 榮輝やく花ゆめは
 果敢無く消えて悲しさよ

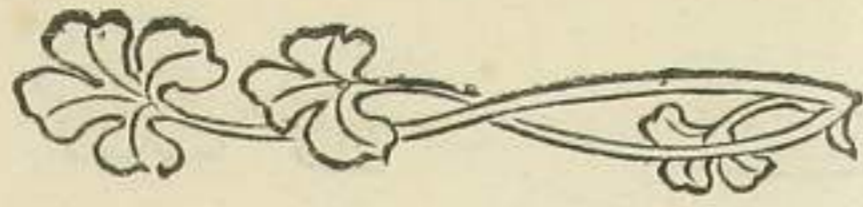
眞心籠めて記したる





勇の文を寸断に
 君江は裂きて丸めつゝ
 悶ゆる胸の惱ましく

あゝ何なれば昭信と
 結婚の式も擧げぬ間に
 かゝる男の歸來て
 我心をば惱まする



文は裂きても捨てにけれ
 「必ず君に逢はまし」と
 書きたる文字は顯然と
 心の中に浮び來て

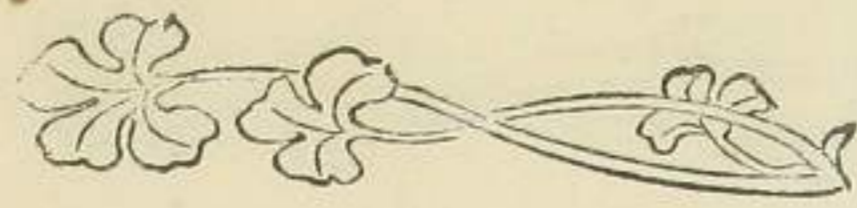
寐ねんとすれど苦しさに
 眠られ難き夜は明けて
 今朝起出し君江子の



花の面ぞいと青さ

君江が心地勝れずと
聞く房江子は驚きて
尋ねにとては來りしが
去りにし跡は淋しさの

獨憂愁に沈みつゝ



「機會見て君に逢はまし」と
勇に書くや返り言
筆投捨てゝ吐息しぬ

君江は人に知られじと
密かに家を脱出でゝ
門に出でつゝ其文を
ポストに入れて歸りしが



折柄をりから來きにし房江よさえ子こが

思おもひなげなる其その様さまを

羨うらやましとも眺ながめつゝ

いと我わが身みを果敢はかなむや

心地こち癒いえつと房江よさえより

聞ききたる祖母そぼが諸もろ共ともに

寶石ほうせき商しやうに行ゆかましと

誘さそふを聞きくも夢ゆめ心地こち

疑うたがはれじと君江きみた子こは

すゝまぬ心こころ勵はげまして

共ともに家路いへぢを出立いでたちつ

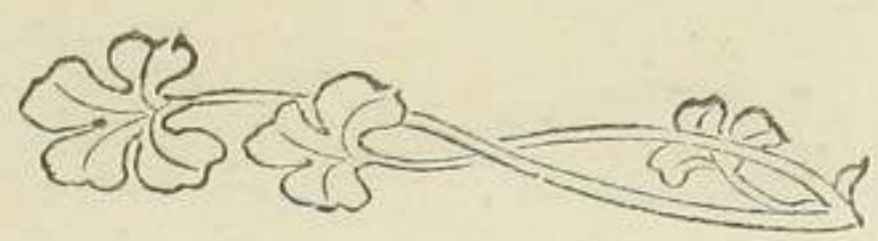
三人みたり共ともなる馬車ばしやの中うち

星ほしの光ひかりと燦然きらきらに



輝やく珠を眺めても
 憂ひ顔なる有様を
 祖母は何とや思ふらん

彼よ是よと撰みつゝ
 人も羨む數々の
 寶の珠を購なひて
 三人は家に歸りしが



王妃の様に美しくしき
 花の君江が其を着けん
 榮の様を思ひつゝ
 房江は胸に微笑みぬ



十六

空も朧の花曇り
 そよくと吹く春風は
 散る花瓣を誘ひつゝ
 香ぞ立迷ふ夕まぐれ
 君江は戀ふる昭信と



うち伴立て諸共に
 櫻が下の物がたり
 心は夢にあこがれて
 「心地いかに」と尋寄る
 其昭信が言の葉の
 身に泌々と嬉しさに
 憂も惱も忘るゝや



戀人らしく寄添ひて
 深く舐はる昭信の
 なつかし面仰ぎつゝ
 袂ぞぬるゝ花の露

「戀しき君よ何時迄も
 忘れじ君がみ情を――
 死ぬとも君の妻ぞ」迎

涙に目をばうるませぬ

何處の寺に撞く鐘の
 響に散るか櫻花
 雪より白き君江子の
 花の面にかゝるなり

花も微めく夕暮の

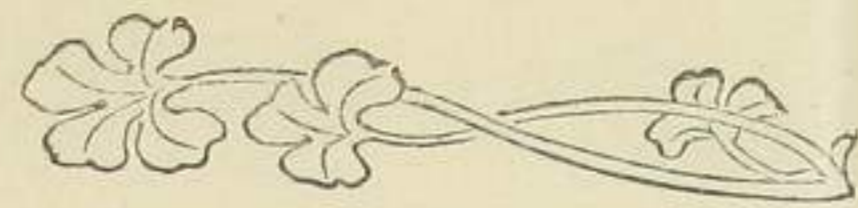


深きあはれに打たれたる
 昭信は今君江子の
 熱き玉手を握り乍ら

「海覆へる世なりとも
 いかで御身を見捨てんや
 逆上せし耳に口寄せて
 言葉優しくさゝやけば

答へは無くて君江子は
 握り合ひたる手の上に
 花美しき唇つけつ
 落す涙の一しづく

熱き心の浸々と
 戀をおぼえし昭信が
 千代放たじと握る手に





愛の力はこもりけり

蜜の様なる樂みに
酔へるが如き君江子は
猶いつ迄も、何時迄も
斯くてあらんと願ひしが

夜の迫るに驚きて

歸るや己が居間の中
一人と成れば淋しさの
身に轟々と襲ひ來て

寄せ集めたる悲しさに
堪へぬ心は惱ましく
身をば机に投掛けて
我にもあらず泣伏しぬ





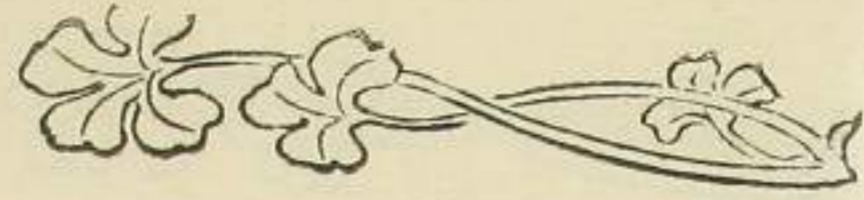
心を籠めて戀ふるなる
 君江が我を卑しみて
 昔の戀を捨てけりと
 知らぬ勇は度々に

又も寄せ來る戀の文
 「妻に成るとの言の葉を
 貴女の口より聞かざれば

我は死なんと歎きしが

勇が熱き心をば
 深くも厭ふ君江子は
 いと淺はかに結びたる
 昔の誓くやみつゝ

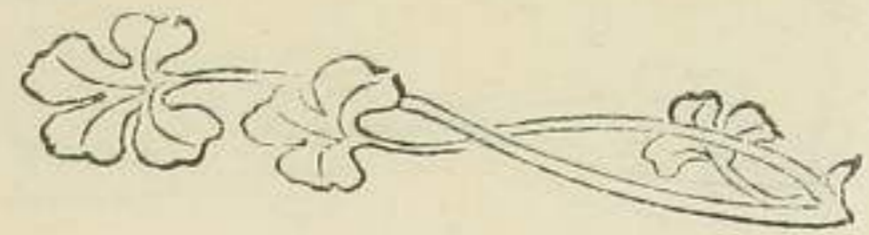
強き恐怖に美しき



すゝまぬ乍ら君江子は
 憂を抱く夢ごゝろ
 二人と共に出立ちぬ
 外は長閑けき春の風



花の面も變らふや
 いかにもせましと煩へる
 心の中は立つ波の
 夫れと知らねば昭信が
 花の上野に名も高き
 展覧會に行かましと
 房江共々すゝむるに



十七

君江房江の乳姉妹は
 昭信共に伴れ立ちて
 行くや上野の花の山
 春の光は充ち満ちて
 行かふ人も美しき

花の都のさくら時
 香をば尋ねて蝶々の
 立舞ふ影ぞ長閑なる

清き景色を眺めつゝ
 いと嬉しげの房江子に
 君江も何時か誘はれて
 少し慰む胸の中



咲く花よりも美しき
 二人の姿たゞへつゝ
 過行く人の言の葉を
 聞くに房江は耻かしく

顔を赤めて君江子と
 歩急がす折からに
 來にける人は昭信と

面合はせて近づきつ

君江を夫れと見るよりも
 悲しき様に沈みしが
 四人共々うち伴れて
 又進み行く公園の中

あはれ雄々しき丈夫の



綾小路と名をば呼ぶ
 彼は大尉の身なれども
 一目君江を見てしより

猛き心もいつしかに
 戀てふ事を知初めて
 いと深くしも悶えしが
 楽しく描く夢破れて

戀ひし君江は昭信の
 妻と成るべき其事を
 聞くに心も亂れつゝ
 春も物憂き夕思

つらき悶を忘れんと
 支那に旅立つ胸の中は
 搔撈らるゝ如くにて



寧ろ死なんと思ふかな

君江は我を戀慕ふ

綾小路の心をば

憐れと酌みて様々に

情も深く慰めつ

うち垂頭し其人が



「汝の爲とあるならば
疾く歸來て盡さんと
言ふを嬉しと聞きにしが

ふと向なる木の蔭に

勇の姿認めつゝ

變る面の青さめて

走るが如く逃れけり



心をこめて我戀ふる
 君江がいとも冷やかなの
 其舉動を夫れと見る
 勇の胸や如何ならん
 怒に震ふ双の手に
 力をこめて握りつゝ
 にくき君江が後姿を

血走る眼に睨む哉

打萎れつゝ立歸る
 綾小路を見送りし
 房江は姉の面色の
 いとも青さを眺めつゝ

深く心に懸れども



「罪」の畫見んと諸共に
 展覽會に赴きぬ
 君江は騒ぐ胸の奥

夢の心地に垂頭し
 面をあげて眺むれば
 罪の囚獄に繋がれて
 悩む少女の畫姿や

いと凄まじき有様を
 見るに眼も眩きて
 思はず土に倒れんと
 するを二人は支へつゝ



十八

いと怖ろしき罪の書を
 見し君江子は己が身に
 来る審判の怖ろしく
 氷と冷ゆる胸の中
 昭信の手に扶けられ



夢の心地に歸りしが
 勇より來し玉章は
 其夕暮に届きつゝ

「逢はずば汝に悔あらむ
 今更如何に我身をば
 捨てんとするも許さんや」
 讀むに君江は震ひしが



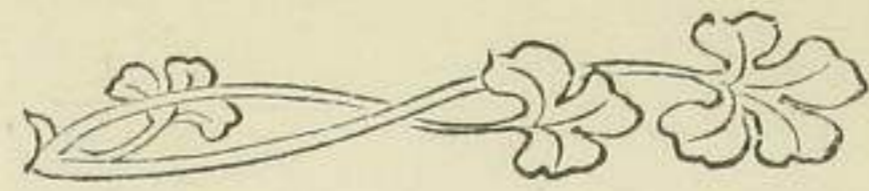
「せめて七日を待てかし」と
 おのゝく筆に認めて
 時の免れに息を吐く
 心の中ぞ惱ましき

祖母は君江が有様を
 心深くも憂ひつゝ
 人來ぬ里に行かましと

君江が望む其まゝに

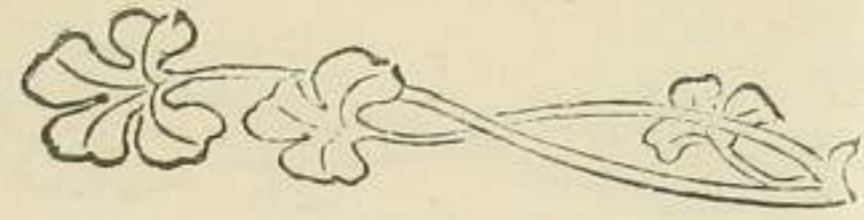
房江共々うち伴れて
 行く平磯の下邸
 清き眺に君江子の
 惱も稍に薄らぐや

見渡す限青々と



果も波間に飛ぶ鳥の
下をたゞよふ漁舟
繪にもまされる眺をば

君江は房江共々に
巖の上に眺めしが
折から來つる昭信は
二人の前に近きつ



房江が去りし其後に
いと睦まじく寄添ひて
微笑み交す胸の中は
あはれ何にか譬ふべき

昭信は今約婚の
珠の指環を君江子の
眞白き指にさし乍ら



清き面も輝きて

其手に軽く接吻つ

「長く別れてあれかし」と

言ふを聞くなる君江子の

身も融了る心地しつ

去る昭信を見送りて

行手の夢に耽り居る

折しもあれや後より

立顯はれし人の影

「見付け果てつ」と嘲笑ふ

姿を見れば怖ろしき

思堪へせぬ勇なり

君江は震ふ花姿





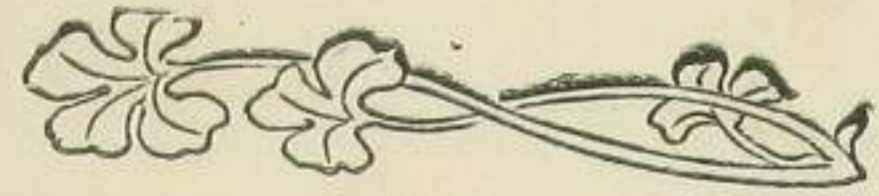
いかにせましと怖れしが
 勇は獨微笑みて
 我を何處に避くるとも
 いかで逃るゝ事を得ん

汝の此處にある事を
 三室滋に聞知りて
 尋ね當てつる今日こそは

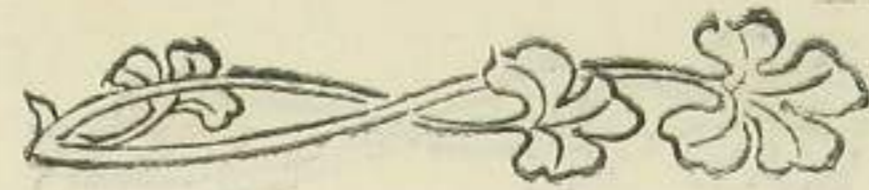
偽言ふを許さんや

涙もつ目に仰ぎつゝ
 憐れ求むる君江子は
 激む面に見下して
 妻に成れよと迫りしが

否む君江を見るよりも



五日の後に必ずと
 返言をば誓はせて
 勇が去りし其あとに
 君江は獨愁ひつゝ



「大詐欺師」よと叫びつゝ
 紀念と昔君江子が
 知らて送りしバイブルの
 中にありつる品々の
 證據の品を示しつゝ
 房江の幸を盗みたる
 君江の罪を發く哉



身は果も無き曠野に
 罪の終を照らさるゝ
 淋し感に引かれつゝ
 下なる海の暗きより
 今にも鬼の顯はれて
 我身を地獄に墮さんと
 思ふに胸の騒立つや



十九

あはれ君江は今更に
 昔の罪を責められて
 歎甲斐無き現身を
 悶煩らふ岩の上
 我世に花の影消えて



我^{わが}手^ての指^{ゆび}に輝^{かがや}ける
 玉^{たま}の指環^{ゆびわ}を見^みるにつ^つけ
 戀^{こひ}しき人^{ひと}の昭信^{あきのよ}も
 我^{われ}捨^すてなんと思^{おも}ひては

一^{ひと}つに募^{つの}る悲^{かな}しさに
 小^{ちひ}さき胸^{むね}は裂^さけやせん
 腦^{なう}も亂^{みだ}るゝ夢^{ゆめ}心^{こころ}地^ぢ

正氣^{しやうき}をさへに失^{うしな}ひぬ

斯^かかる事^{こと}をば知^しらなくに
 今^{いま}し歸^{かへ}りし昭信^{あき}は
 岩^{いは}の上^{うへ}より駈^かけ下^{くだ}る
 人^{ひと}の姿^{すがた}を認^{みと}めつゝ

心騒^{こころさわ}ぎて來^きて見^みれば



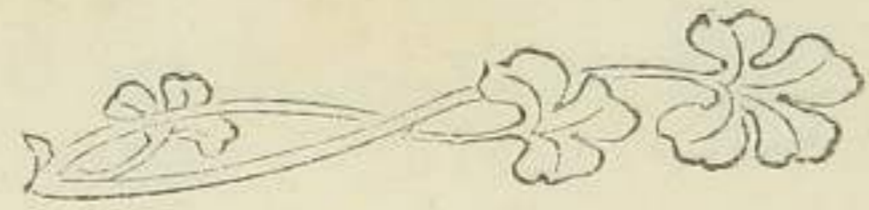
花の面の色も無く
うち倒れたる君江子が
正氣もあらぬ其様に

急がはしくも呼活けつ
如何にせしやと尋ねれど
只逆上せしと許にて
愁ぞ掩ふ花の面



二人伴立ち別荘に
いと淋しくも歸りしが
君江は房江共々に
又も都に歸りつゝ

勇に夫れと文書きて
「十日の朝に我家の
後の庭に來れかし



其處に逢はんと言遣りぬ

君江は迫る祝の日の

其準備を見るにつけ

昔の罪の悔まれて

いよく惱む胸の中

高濱づれに添ふならば



寧ろ死なんと思ひつゝ

碎く心の煩らひは

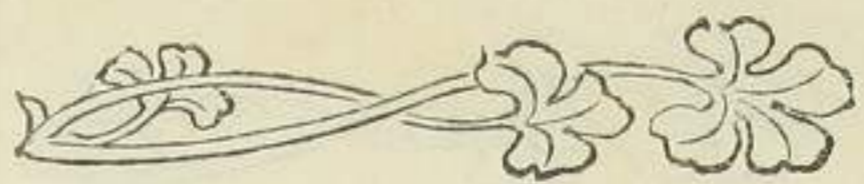
隠せど面に顯はれて

昭信はいと愁はしく

御身の胸に蟠る

憂をわれに明かせよと

言葉やさしく尋ねれど



やさしき言聞くにつけ
 君江はいよゝ苦しみの
 打明けんとは思ひつゝ
 たゆたはれぬる其心

情も熱き昭信に
 手を握られつゝ身悶えて
 かくて此儘死にたさと

啣つも深き憐れなり

房江は斯と昭信に
 聞きて心に愁ひしが
 三室滋は折柄に
 君江を尋ね來りつゝ

勇と昔君江子が

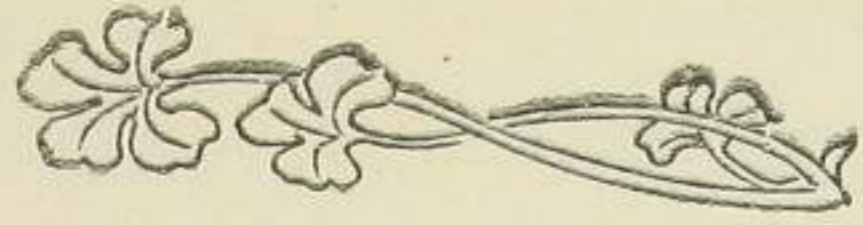


誓ひし事を新聞に
書かんと言ひて喝しつゝ
數の黄金を食るや

その報に君江子が
式あぐる迄勇をば
尙今霎時待たせんと
固く誓ひて歸りけり



心も闇にかきくれて
黑白分たず迷ひ
頼めぬ人を頼むなる
君江が上のあはれさよ



二十

庭に向へる居間の中
 君江は夢の心地にも
 ひとり思に沈みつゝ
 眺むる池の花あやめ
 色も濃紫の花弁は

清き流れに影さして
 水の面より吹起る
 風に若葉のそよぐなり

三室が誓甲斐ありて
 猶八日をば待つといふ
 勇の文を受取りし
 君江は心嬉しさの



其間に疾くも式擧げて
 たゞ一日だに昭信の
 妻よと人に呼ばれなば
 願足らんと思ひつゝ
 其日と成らば如何にせん
 逃るゝ術の無けれども
 たゞ榮ある祝の日の

近づく事を慰めに

過ぐる日数もいつしかと
 祝の其日に迫りしが
 君江は明日を待詫びつ
 幻に恁るやあしまづき

よし我罪の顯はれて





悲しき時の到るとも
身の終をば潔く
輝かさんと思ひつゝ

深き思に沈みしが
ふと面あげて眺むれば
思ひも寄らぬ昭信が
怒りて其處に佇みつ

君江の罪を責立てし
疾く此家を出去れと
言ふ其聲も激ましく
面の色は變りたり

死ぬる許の驚きに
君江は何といふ言も
只うち泣きて昭信の



足あしの下もとにとひれ伏ふすや

君きみ江えが死しぬも放はなたじと

抱いたける指ゆび環わとらんと迎むかへ

家か扶よが迫せまるに驚おどろけば

假かり寐ねの夢ゆめは覺さめてけり

君きみ江えはいとも怖おそろしく



夢ゆめよりさめて慄ふるひつゝ

心こころとも無なく約よ婚こんの

珠たまの指ゆび環わを眺ながめしが

怪あやしルビーの其その色いろは

いと悲かなしくも變かりつゝ

凶あや事ことおこる前まへ兆せぞと

思おもふに胸むねも騒さわがれて



夢の心地にとる筆の
いと懐しき昭信と
房江へ残す書置の
懺悔の文を認めつ

折から來つる房江子に
夢の事をば話しつゝ
ルビーの色の變りしを

それと示すを房江子は

思無げにも微笑みて

「明日は目出度き今日なるに
何いたづらに愁ひつゝ
甲斐無く胸を痛むらん」

情も厚く慰むる



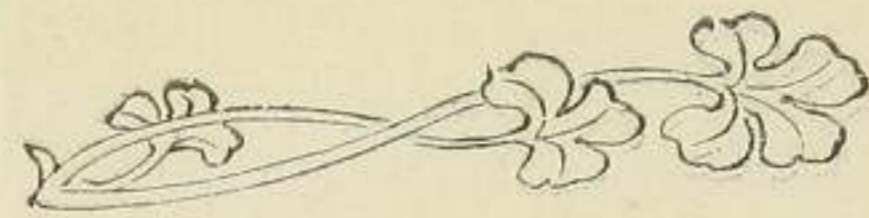
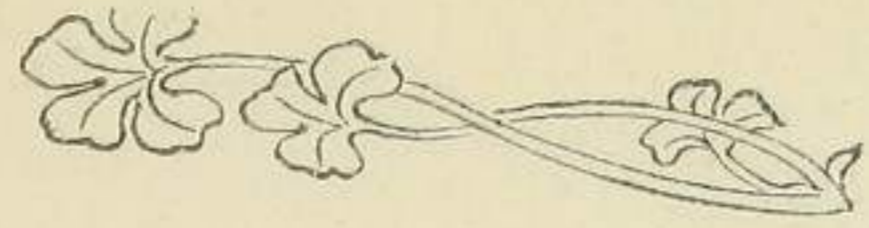


嬉^{うれ}しき明日^{あす}に引^ひかされて
 夢^{ゆめ}の様^{よう}なる樂^{たの}みに
 歸^{かへ}る君^{きみ}江^えが花^{はな}の面^{おもて}は
 今日^{けふ}珍^{めづ}らしく輝^{かがや}きて



其^{その}手^てを固^{かた}く握^{にぎ}りつゝ
 「汝^{なんぢ}の戀^{こひ}を奪^{うば}ひたる
 我^{わが}身^みの罪^{つみ}を許^{ゆる}せよ」と

言^いふも心^{こころ}の苦^{くる}しさや
 姉^{あね}の言^{ことば}葉^はを打^{うち}消^けして
 笑^{わら}ふ房^{ふさ}江^えに誘^{さそ}はれつ
 いっしか憂^{うれ}も忘^{わす}れけり



廿一

今日を譽の祝の日と
 殿の中の人々は
 皆華やかに微笑みて
 榮の朝をことほぐや
 君江も戀ふる昭信の

妻と成るべき其日ぞと
 思へば心うれしさに
 百の憂も忘れつゝ

丈の黒髪高髻に
 いと美しく結ばせて
 衣装ひし其姿
 花の精とも見えにけり



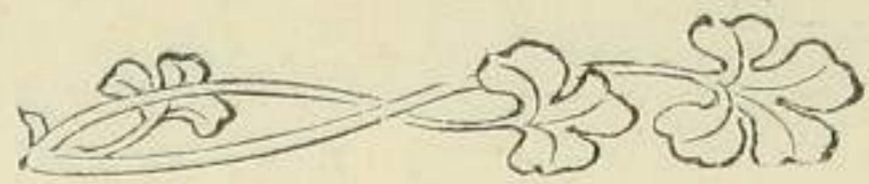
君江は跳る心をば
 我と抑ふる居間の中
 机に凭りてつくくと
 物うち思ふ折柄に

襖を開く人の影
 誰ぞと見れば花と呼ぶ
 乙女は前に近づきて

差出す小さ紙の片

それと見るより君江子は
 俄に闇の襲ひ来て
 わが身を遠く伴れて行く
 心地に胸のおのゝきつ

恐るゝに文見れば



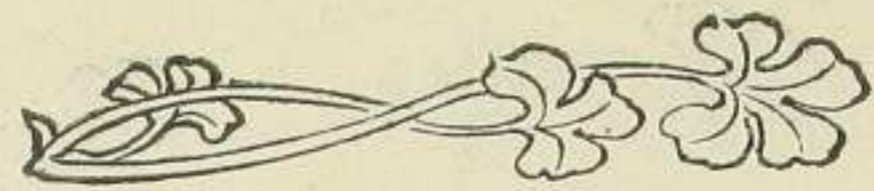
「七日が程を待ちぬ可き
 前の誓は改ためて
 今逢はん」とぞ記されぬ

君江は犠牲にとられたる
 羊と心定めつゝ
 密かに庭に下立ちて
 行くや後の松林



外に待居し勇をば
 林の中に誘ひつゝ
 さし向ひたる君江子の
 心の中や如何ならん

勇はいとも激みつゝ
 戦慄く君江見下ろして
 其面色も凄まじく



妻つまに成なれよと迫せまりしが

ものをも言いはて垂たれ頭たまし

君きみ江えが雪ゆきの袷あし足あしに

今いま和わらかき日ひは落おちて

あたり静しづけき松まつのかげ

髪かみは光ひかりに輝かがやいて



や、青あおざめし花はなの頬ほは

石いしを刻きざみし如ごとくにも

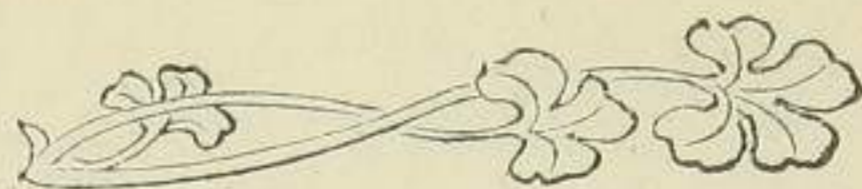
いと美うつくしう見みえにけり

勇いさむらは言ことば葉はやはらげて

汝なれは此この身みの妻つまと成なる

外ほかに運さた命めは無なきものを

などて心こころのたゆたへる



言ふを聞くなる君江子は
 何と心や定めけん
 怒る勇を冷やかに
 眺むる眼の美しく

我身の罪を人々に
 明かすと言ひて脅すとも
 心定めし我身には

何おそろしき事あらん

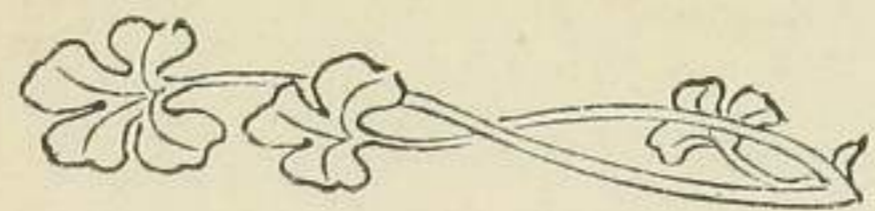
妻と成れよと迫るより
 我身が事はあきらめよ
 数の黄金を興へんと
 勇の面眺めつゝ

「死ぬとも妻と成らんや」と



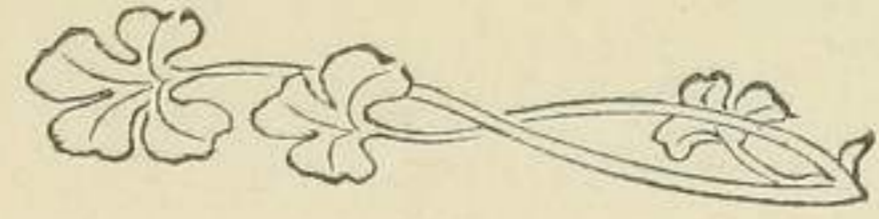
言ふを勇は聞くよりも
 一よき覺悟ぞと叫びつゝ
 ナイフを探る袖の中

悪魔の如く凄まじき
 勇の面に血は湧きて
 白刃の光燦めくと
 見る間に突くや珠の胸



血汐の中に横はる
 君江の面眺めつゝ
 勇は落す袖の露
 夢の心地に立去りぬ

あゝ美しく装ひし
 君江が花の亡骸を
 抱きて立ちし昭信の



胸の惱や如何ならん

勇が事も細々と

告ぐる言葉に昭信は

罪に死にたる君江子の

心あはれと思ひつゝ

房江は夫れと我上を

知るに嬉しさ悲しさを

取交へたる胸の中

姉の上をば歎きしが

悲しく出づる葬式の

今日は昨日に引かへて

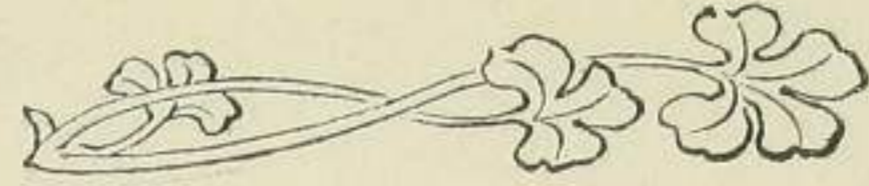
打沈みたる殿の中に

香の烟も迷ひけり



新家庭
詩
乳姉妹の歌
終

安やすけく眠ねむる花はなの人の
夢ゆめも楽たの園ちに遊あそぶらん



やがて房江ふさえと昭信あさのぶは
樂たのしき家け庭ていをつくりつゝ
幸さいに満みちたる高輪たかゐりの
花はなのおとどは榮行さかゆくや
春美はるみしく咲句さきくふ
櫻さくらが下しものおくつさに

有所權作著



刷印日七十月四年九世治明
行發日十二月四年九世治明

若作者 瀧口白羊
 發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地 和田 久
 發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地 春 陽 堂
 印刷者 東京市日本橋區西紺屋町廿六番地 佐久間 衛 治
 印刷所 東京市日本橋區西紺屋町廿六番地 株式會社 秀英 堂

定價十四錢



